

寄り添う

# 外国由来の子どもたちと共に

前回、外国由来の子どもにとって「異文化」である日本の「学校文化」の話をしました。来日により、これまでとは異なる文化の中で生きることになった子どもたちは、どう葛藤し、それを乗り越えていくのでしょうか。

6年生のP君は、学校で禁止されているシャープペンシルをいつも筆箱に入れていました。友だちにも注意されるのですが「削らなくていいし便利だ」と自分を曲げません。担任の先生は言いました。「日本の学校ではね、鉛筆を削ることも勉強の

準備。削りながら心も整えていくんだよ」。先生はP君の文化も気持ちも否定することなくこう話したとこ

的な態度ばかりとっていました。それでも支援員は根気よくQ君に寄り添い、担任の先生、友だちもそれに付き合いました。そんなある日、彼は突然日本語でこう話しました。「ぼく、日本に来たばかりのころ、怒ってた」。Q君はこの1年、文化

気持ちも自然に日本語で表せるようになりました。この2人に共通するのが「自分が受け入れられた」と肌で感じ、安心感が得られたことです。そこには、日本の学校文化に対する彼らの歩み寄り、彼らを否定することなく丸

## 異文化を受け入れる (下)

ごと受け入れた周りの温かさがありました。

ろ、次の日から鉛筆を持ってくるようになったといえます。先生に受け入れられたP君は、今度は日本の学校文化も自ら受け入れたのです。

も言葉も異なる日本で生活し、勉強しなければならぬ自分の状況を受け入れられず、その気持ちを全身で訴えていたのです。「自分の居場所

に来てもいいんだ。ぼくは、ここにいってもいいんだ。ーぼくは、ここにいたい！」(岩城けい著『Masato』より)。

日本語が何もわからず転入してきた3年生のQ君。支援開始後約1年間、日本語をほとんど口にせず反抗

だ」と思えるようになった時から、Q君の表情は穏やかになり、自分の

(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子)